

論文内容要旨(乙)

昭和大学皮膚科において1990-2010年に
施行された外用薬のパッチテスト結果の解析

昭和学会雑誌 第73巻 第4号 2013年

内科系皮膚科学 長村蔵人

外用薬はさまざまな疾患の治療目的に用いられているが、それ自体が接触皮膚炎を生じることもある。外用薬による接触皮膚炎を検討する目的で、20年間のパッチテスト結果を検討した。1990年4月より2010年3月までの20年間に昭和大学病院附属東病院皮膚科を受診し、外用部位に憎悪ないし新生の皮疹を認め、外用薬のパッチテストを施行した316名(男101名、女215名、平均年齢50.1歳、SD21.8歳、Tabl 1)を対象とした。対象者の疾患は湿疹・皮膚炎群が277名(87.7%)で、そのうち242名(76.6%)は接触皮膚炎であった。パッチテストは被疑薬剤を軟膏、クリーム基剤はFin Chamber®を、液体基剤はパッチテストテスター「トリイ」を用いて健常皮膚に貼付し、48時間後に除去した。光接触皮膚炎が疑われた3名に対しては、2系列の貼付を行い、一方を24時間後に除去、1/2 MEDのUVAを照射した。判定は72時間後にICDRG(International Contact Dermatitis Research Group)基準に基づいて施行し、+~+++ (光パッチテストはPh+~Ph+++)を陽性とした。貼付した薬剤の内訳はステロイド外用薬97名、点眼薬85名、消毒薬63名、抗菌剤58名、非ステロイド消炎剤49名等で、平均貼付数は2.94枚であった。陽性反応は316名中107名(33.9%)に認められ、非ステロイド系消炎剤のブフェキサマク15例、消毒薬のポピドンヨード13例の順に多かった。今回の検討からブフェキサマクに限らず、NSAIDs外用薬はriskの大きい薬剤群と考えられた。5年前のパッチテスト陽性率の推移ではポピドンヨードにおける減少、止痒剤における増加がみられた。原因物質は必ずしも主成分ではなく、塩化ベンザルコニウムなどの基剤による接触皮膚炎も認められ、原因薬剤のみならず原因物質の同定が望ましいと考えられた。硫酸フラジオマイシンに対する感作者の増加には、含有されて

いるやくざいの眼瞼への汎用が影響している可能性が高かった。したがって、外用薬の使用に際しては感作性と使用部位を考慮して選択する必要があると考えた。他方、硫酸トコフェロール(Vit.E)、防腐パラベンなど、接触皮膚炎を生じる頻度が稀な化学物質で生じた例も認められており、あらゆる物質が接触皮膚炎を生じる可能性を念頭に置いて外用薬を用いる必要があると考えた。

結論：一施設における長期間にわたるパッチテスト結果の集積は薬剤間のパッチテスト陽性率の比較や時代による陽性率の変化を検討する上で有用と考えられた。